The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	和辻と九鬼の自己と他者の問題について
Author(s)	劉, 静瑜
Citation	年報人間科学. 2012, 33, p. 89-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5697
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

和辻と九鬼の自己と他者の問題について

劉　静瑜

要旨

本文では和辻哲郎と九鬼周造の自己と他者について論じたい。九鬼周造は論文「「いき」の本質」、また著作『「いき」の構造』、『偶然性の問題』において一貫して人間存在の無根拠さを説き、徹底した二元性を強調している。

他方、和辻哲郎は『風土』、『古寺巡礼』、『日本精神史研究』において示されたように、人間存在のもっとも重要な基盤を空間性に置き、人間存在を間柄存在として把握していた。さらに論文「人間の学としての倫理学の意義」、著作『人間の学としての倫理学』『倫理学』と三つの論考において、家族、親族、地縁共同体、経済共同体、文化共同体のように階層的な共同体論を通して倫理学を形成した。

和辻と九鬼は、自己と他者の関係において、日本的特殊性を見出そうとしていたことである。

キーワード

自己、他者、粋、間柄、共同体

一、はじめに

九鬼周造（一八八八－一九四一）は論文「「いき」の本質」、また著作『「いき」の構造』、『偶然性の問題』において一貫して人間存在の無根拠さを説き、徹底した二元性を強調している。

他方、和辻哲郎（一八八九－一九六〇）は『風土』、『古寺巡礼』、『日本精神史研究』において示されたように、人間存在のもっとも重要な基盤を空間性に置き、人間存在を間柄存在として把握していた。さらに論文「人間の学としての倫理学の意義」、著作『人間の学としての倫理学』『倫理学』と三つの論考において、家族、親族、地縁共同体、経済共同体、文化共同体のように階層的な共同体論を通して倫理学を形成した。

和辻と九鬼は、自己と他者の関係において、日本的特殊性を見出そうとしていたことである。

それぞれ風土と「いき」の具体的事象から日本の特殊性を取り出し、新たな倫理を形成しようとするが、ここで注目すべきなのは、自己と他者の関係である。周知のように、和辻は人間存在を間柄存在として捉えつつ、倫理学を個人の道徳意識として考えるのは近世の誤謬だと批判した。和辻は倫理学というものをエシックスではなく、ポリティケーとして把握している。つまり共同体においてしか倫理は論じられないと強調している。したがって、彼の倫理学は、性的関係を前提とする「二人共同体」を原点にしている。

一方、倫理というよりは美学の範囲内のことであるが、九鬼周造は『「いき」の構造』において、「媚態」

の内容について「一元的の自己が自己に対して措定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である」(1) と述べている。九鬼は「いき」というものを、男女が無限に近づきながらも、決して合一することがなく、あえて緊張関係を楽しむ状態として理解している。「いき」の関係性は他者に対して開かれた道を示すことと、合一するのを拒否することとの微妙なバランスによって成り立っている。したがって、九鬼にとって自己の倫理とは二元的関係においてしか論じられないと考えられる。

和辻の二人共同体は明確な合一に基づいており、九鬼の二人性は内容が異なるが、双方とも他者との関係においてしか自己を捉えることができないとここでは論じたい。本論は九鬼の『「いき」の構造』と『偶然性の問題』を踏まえ、和辻の二人共同体論と比較しつつ、それぞれの描く日本の倫理的特殊性を明らかにしたい。

二、我汝関係の基本構造

九鬼において、自己と他者との関係の原点は性的関係によってはじめて成立するものと考えられる。九鬼が『「いき」の構造』で述べている「いき」は、日本の芸者の結婚から自由な生き方や、恋愛などを原型としていた。それは、結婚などを前提にせず、束縛された恋愛からも自由になるものである。彼は「日本の事」(2) というフランス語で書いた短篇集の中で、日本の芸者と比較しながら西洋の結婚・恋愛観について次のように考察した。西洋近代の恋愛観では、恋愛関係は結婚を目的にするものであり、性的関係は夫婦の間でのみ許されるものであるが、その性的関係は必ずしも肉体的衝動をともなうものではない。

このようなキリスト教的な霊肉二元論に対して、九鬼は日本の芸者に求めた「いき」を理想的な男女関係としている。「「いき」の本質」では、「「いき」は性的関係を予想する意識現象で、異性に対する一種の媚態又は嬌態である。自己に対して異性を置き、自己と異性との間に一種の関係をつける二元的立場である」(3) と述べられている。媚態は異性を欲望するものであり、異性を征服し一元化するのを目的としている。しかし一元化することによって変化する可能性を失ったときに、媚態はみずから消滅するため、一元化はあくまでも仮想の目的でなければならない。九鬼は和辻と同様に、心身同一の恋愛関係を求めながらも、未来に対して生成変化する可能性が保証される。

和辻の場合は、人間存在を独立した人格としてではなく、「間柄」の関係性によってはじめて成り立つものとして考える。そこで、最小単位の二人共同体は和辻の倫理学体系における核心であり、これには完全な相互参与が必要とされる。その参与には心のみならず、肉体の親密関係も要求される。自分のすべてを相手に開示しなければならず、隠し事や秘密は禁止される。和辻はここで、ジンメルの二人団体説 (4) を参照しながら、親密性（Intimität）を二人共同体のもっとも重要な内容として規定する。和辻の場合、親密性とは心身合一の状態であり、その特殊内容として性的関係が指し示される。このことから二人共同体は夫婦の間でのみ可能であり、兄弟や友人関係などの二人団体においては成立しないのである。性愛関係を持たない二人団体は二人でなければならない必然性を持たないからである。

共同存在の二人性が必然的であり、第三者の参与を許さないことが本質的であるような二人共同体はどこにあるか。二人の間の私的存在が一つとしての共同存在を形成しているような二人共同体はどこにあるか。我々はそれを男女の間の存在共同に見いだし得ると思う。(5)

したがって、親密性によって成立する二人共同体は、第三者の参与も許されるものではない。第三者の参与によって、二人共同体の信頼関係も崩されることが予想できる。つまり、二人共同体は徹底した閉鎖性を通じてのみ実現される。さらに、親密性によって成立するがゆえに、二人共同体は二重性格を帯びてくるといえる。内に対して「私」は消滅し、二人の間ではすべてが公開になる。同時に、外に対してはもっとも顕著な私的存在になる。

和辻は『倫理学』において、キリスト教の性愛否定の立場を批判していた。キリスト教において、肉体を不潔なものとして捉える傾向が強く、身心合一の恋愛は否定されるようになった。しかし、性的関係は単なる自然衝動のように思われることが多いとはいえ、その根底には人格の尊重もともなわれていると和辻は考える。性的関係が排除された二人共同体は徹底した親密性を持たないため、信頼関係が崩れるのは簡単なことになる。

三、我汝関係によって繋ぐもの

我汝関係が重要視しなければならないのは、九鬼においても和辻においても、人間存在を独立した個人と見なさない点である。つまり、人間存在はつねに自己の意志と関係ないものに左右されなければならないのである。それは九鬼においては偶然性の論理であるが、和辻の場合は風土性の論理だと考えられる。

前節で述べたことから、九鬼における自己にはつねに他者の存在が必要であると考えられる。『「いき」の構造』の「「いき」の内包的構造」の章で、九鬼は「いき」の三つの契機として、意気地、諦め、媚態を挙げ、「いき」を「垢抜けして（諦め）、張りのある（意気地）、色っぽさ（媚態）」として定義している。九鬼は「いき」を江戸時代の遊里に由来する美意識・倫理意識として取りあげていた。「いき」における自己には、他者のまなざしがすでに含まれている。先に述べたように、「いき」の意識現象は媚態、意気地、諦めによって表される。さらに「いき」の自然的表現においては、一元の均衡を崩し、二元的対立が表現されなければならない。自然的表現とは発話や身振り、髪形や服装などの身体による表現である。その具体例として着物の抜き衣紋が挙げられる。衣紋の平衡を軽く崩し、異性に対して肌への通路をほのかに暗示しながら、大幅に露出する野暮に陥らないところが「いき」の表現になる。さらに、着物で包んだ全身に対して、足だけ露出させるのも媚態の二元性を表している。

九鬼が客観的形式においてまで「いき」の表現にこだわっていたように、表現する自己に対して、つねに見るものとしての他者が想定される。「いき」の身体的表現はしだいに舞踊に近い行為にまで洗練されていき、他者の前で自己を演じることによってはじめて自己が生まれると田中久文氏が指摘している(6)。九鬼の二元性は、決して他者との合一によって一元に回収されないものであり、同時に、他者抜きで成立

するものでもないと考えられる。

しかしながら、九鬼が我汝関係によって共同体を形成することはない。九鬼の議論では、我汝関係は不変なものを形成するのではなく、未来に対する不安定を含みながら生成変化していくものである。九鬼は『偶然性の問題』において、さらに自己成立の原理に関して検討した。彼は「必然性」と「偶然性」を次のように定義する。「必然性」とは必ず然る有ることを意味しており、存在が何らかの意味で自己のうちに根拠をもっていることである。それに対して、「偶然性」とはたまたまあることを意味している。存在は自己のうちに十分の根拠をもっておらず、無いことのできる存在になる。したがって、必然性が自己同一性を本質としているのに対して、偶然性は自己同一性が崩れたところで成り立っている。

九鬼によれば、西洋哲学は絶対不変の同一性の原理によって展開されてきた。しかし、個物としての自己も道徳法則も同一性によって成立するのではなく、さまざまな偶然の出来事に遭遇すると九鬼は考える。九鬼は必然性と偶然性をそれぞれ三種類に分けるが、それらは「定言的必然」「仮説的必然」「離接的必然」と「定言的偶然」「仮説的偶然」「離接的偶然」である。定言的偶然は一般概念と個物の関係について、個物が一般概念に対してつねに例外的存在であることを説明する。例えば、クローバーはほとんどの場合三つ葉であるが、四つ葉クローバーは現実に存在する。一般概念との間に同一性を欠き、個物が例外的存在になることは人間においても同様である。人間の本質は一般概念によって説明することが不可能なものであり、すべての人間は概念から外れた例外の存在だと考えられる。

ついで、仮説的必然とは「もしAならばBである」という因果法則によって成立する原理であり、定言的必然と同様に同一性を原理とするといえる。しかし九鬼は、屋根から瓦が落ちてきて、軒下にあった風船に当って、破裂させたことを例に挙げた。現実の世界において、独立した二つの因果系列が出会って、想定外の結果が生じてしまうことは決してまれではない。道徳法則の場合も同様、偶然な出来事が避けられないものであれば、同一性の原理も意味がなくなる。

九鬼は『偶然性の問題』の結論部で、以下のように述べている。

> 道徳の内容は現在の呈供する偶然性によって個別化されたものでなければならない。道徳の課題とする実践的普遍性は抽象的普遍性であってはならない。偶然を契機として全体を内包的に限定する具体的普遍でなければならない。……道徳が単に架空なものでなく、力として現実に妥当するためには、与えられた偶然を跳躍板として内面性へ向って高踏するものでなくてはならぬ。(7)

九鬼にとって、道徳が同一性による普遍な法則であれば、それは単なる抽象化された原理であって、何の意味ももたない。他者のことや未知の出来事はたえず生成変化する事象であり、そこから、同一性の原理によって把握することの出来るものではない。

九鬼と同様に、和辻倫理学の原点は彼の生い立ちに関わっていると坂部恵氏は指摘していた。和辻の場合は、故郷の田舎がその原型とされる。そこでは、人間存在が空間的にひろがる共同体によって、さまざまな役割が与えられ、性格づけられるものとして定義されている。すでに知られているように、和辻倫理

学の大きな特徴はその空間性にあると考えられる。和辻は『風土』（一九三五年）において、旅行中に見かけた風景、肌で感じた湿気の差異によって世界各地の文化を三つの類型に分類した。その分類や内容に関して、独断的だと批判されることも多いが、和辻が主張しようとしたのは、人間存在が環境によって制約される側面をもつと理解することである。

さらに、『古寺巡礼』（一九一九年）にさかのぼると、和辻は奈良・飛鳥周辺の寺社をめぐり、そこに保存された建物や仏像や芸術品を通して、いかにして「日本的なもの」を発見することができるかという問を試みた。和辻は古代日本と古代ギリシアの美術品の近似性について、まずは風土的近似性によるものとして想定する。ギリシアの芸術はインド、中国を経路して日本に入ってきて、それぞれの土地で異なる性格の芸術品に変わっていった。にもかかわらず、日本に入ってきたところで再び古代ギリシアの面影が現れてきたのは、環境あるいは風土の因果性から導かれたことである。しかしながら、和辻は『古寺巡礼』において、風土の重要性だけではなく、異文化受容をも強調したと考えられる。ここにおいて、日本文化の純血性より、その雑種性が肯定されていると坂部恵氏は指摘した[(8)]。

和辻の『風土』は環境決定論ではないが、人間を取り巻く風土の重要性を説いていた。人間存在は普遍原理によって成り立つものではなく、気候や環境によって制約される側面もある。しかし制限されると同時に、そこから文化の特殊性を見出すことができる。このような意図から、『古寺巡礼』において、和辻は具体的な芸術品や芸術のスタイルに関して、古代日本と古代ギリシアとの近似性を検証していた。そしてさらに、自己と他者の出会いの原理をも提示してくれたのである。日本文化の特殊性は閉ざされた環境で発展してきたのではなく、さまざまな文化を受け入れ、日本という風土において育まれてきた。

四、和辻の倫理学

前節では、九鬼は同一性によって成立する道徳法則を批判したと述べた。それは、従来の道徳法則は人間を完全に独立した存在として論じ、現実の中で起こりうる偶然の出来事を考慮していなかったということである。九鬼の出発点とはすこし異なるが、和辻も自身の主著である『倫理学』では、倫理学の意味を問いただし、従来の倫理学説が個人の道徳意識しか論じない点をもっとも重要な問題点として取り上げた。

和辻によれば、人間は共同体の中でほかの人々との関係性によって位置づけられ、役割を与えられる。その役割によって振る舞い方が決められ、「間柄」存在と呼ばれる。和辻の立場からすれば、人間存在を完全に独立した個人として理解するのは誤解だと考えられる。人間存在は人と人との関係性においてしか論じられないので、「間柄」の側面から倫理学を論じなければならないのである。

和辻は『倫理学（一）』の序言の中で、「在来の日本の倫理学書を見慣れた人々にとっては、この書の内容は倫理学書としてははなはだ異様に見えるかも知れない[(9)]」と我々に提示している。さらに論文「倫理学」においても以下のように言及している。

> 我々は以上の歴史的考察に当って「倫理学」という日本語を単純に Ethik の同義語として取扱って来た。それは明治中期に始まって今や一般に承認せられている用法である。しかし我々はその倫理学を人間の学として規定した。すなわち人間をその個別性・多数性・総体性に於て把捉する学である。(10)

和辻は従来の倫理学の研究書に対して不満を持ち、自身の『倫理学』においてそれを問い直そうとしている。「倫理学」という言葉を ethics の日本語の訳として対応させるのは、明治初期に井上哲次郎らによって編纂された『哲学字彙』（一八八一年）によるものであった。今日までも「倫理学」は道徳の学問という意味として使用され続けている。この意味での使用にしたがって、明治末期から昭和初期までの倫理学書は「行為および品性」「意志の自由」「目的と善悪の区別」「動機論と結果論」のような目次が並び、倫理学に関する諸説が挙げられるようなものがほとんどであった(11)。

このような倫理学書に対して、和辻は「倫理学」という言葉の意味を考え直すことから作業を開始した。彼は論文「倫理学」、『人間の学としての倫理学』、『倫理学』と三つの著作にわたりアリストテレス、カント、コーエン、ヘーゲル、マルクスなどの倫理学諸説を考察し、「倫理」という言葉のもつ意味を再考していた。まず、日本語で「倫理」とは、人間共同体における秩序であるとともに、人間共同体を共同体たらしめる秩序でもある。共同体は秩序にもとづくがゆえに可能である。つぎに、ethics という語をアリストテレスの『ニコマコス倫理学』まで遡る。アリストテレス自身がこの倫理学書の中で取り扱っているのはポリティケーのことであり、彼はこの著書を通じて倫理学（ethike）をひとつの学として立てるという考えはもっていないと考えられる。アリストテレスのこの書において、倫理（ethica）とは、人にとっての善がいかにして実現せられるのかを問うことである。そうしてその問いの答えは、統治によって性格が作り出され、性格によって人の善をなす活動が可能になる、ということになる。この全体がアリストテレスにとってポリティケーなのである。

以上のように「倫理」という言葉の意味を明らかにしたことによって、和辻が構想する倫理学が、個人的主観的な道徳意識に関係することではないことが理解できる。

> 倫理学を「人間」の学として規定しようとする試みの第一の意義は、倫理を単に個人意識の問題とする近世の誤謬から脱却することである。この誤謬は近世の個人主義的人間観に基づいている。(12)

倫理という言葉はまず人間共同体に関係するため、共同体を捨象した個人的意識は倫理とは言えない。つぎに、道徳的判断は人間共同体という地盤によって可能になり、その逆ではないのが和辻倫理学の基本の論理だと思われる。和辻は『倫理学』において、「間柄」を人間存在の基本構造として考えており、『風土』の序文でも、ハイデガーが人間を個人として捉えた点に対して批判していた。彼はデカルトからカントを経てハイデガーまでの西洋の人間観、つまり個人主義的人間観を訂正し、人間存在を間柄存在として捉え直すことを試みた。人間存在は、人と人との関係性によって共同体や社会を形成する。しかしこのような立場は西洋従来の倫理観ではあまり重要視されていなかった。西洋の伝統的な倫理観は個人の道徳意識、

例えば道徳法則や善悪の判断などをもっとも重要な倫理内容としていた。間柄の存在も人間存在の重要な次元だと和辻は強調しているように思われる。

五、おわりに

以上のことから、和辻と九鬼の自己と他者の関係性は、必然性＝同一性というものを優位におく西洋の近代哲学が、他者の措定を排除する独我論というべき主体性の枠組みを強く主張してきた点を批判していたものとして考えたい。

文献

九鬼周造（一九八一年版）、『九鬼周造全集』、岩波書店。
和辻哲郎（一九六一年版）、『和辻哲郎全集』、岩波書店。
和辻哲郎、米谷匡史解説（二〇〇〇年）『人間存在の倫理学』、燈影舎。
オーギュスタン・ベルク（一九八八年）『風土の日本』、筑摩書房。
子安宣邦（二〇一〇年）『和辻哲郎を読む』、青土社。
高坂正顕（一九四七年）『西田幾多郎と和辻哲郎』、新潮社。
田中久文（一九九二年）『九鬼周造』、ぺりかん社。
酒井直樹（一九九七年）『日本思想という問題――翻訳と主体』、岩波書店
坂部恵（一九八六年）『和辻哲郎』、岩波書店。
（一九九〇年）『不在の歌』、TBS ブリタニカ。
（一九九五年）『和辻哲郎随筆集』、岩波書店。
（二〇〇六年）『坂部恵集』、岩波書店。
檜垣立哉（二〇〇八年）『賭博の哲学』、河出書房新社。
嶺秀樹（二〇〇二年）『ハイデッガーと日本の哲学：和辻哲郎、九鬼周造、田辺元』、ミネルヴァ書房。
宮川敬之（二〇〇八年）『和辻哲郎―人格から間柄へ』、講談社。
ハンス・リーダーバッハ（二〇〇六年）『ハイデガーと和辻哲郎』平田裕之訳、新書館。
湯浅泰雄（一九九三年）『人と思想　和辻哲郎』、三一書房。
（一九九五年）『和辻哲郎』、ちくま学芸文庫。
湯浅泰雄（一九七三年）『人と思想　和辻哲郎』、三一書房。
（一九九五年）『和辻哲郎』、ちくま学芸文庫。
日独文化研究所年報（二〇〇九年）『文明と哲学』、燈影社。

注

(1)『九鬼周造全集』一、三九頁。
(2)『九鬼周造全集』一巻、四三六頁。
(3)『九鬼周造全集』一巻、九三頁。
(4)『和辻哲郎全集』十一巻、九八頁。和辻によれば、ジンメルは親密性を二人団体の特有構造として捉えている。しか

も二人団体は一人が離れていれば関係が解消されるため、個々の人を超越した「全体」は存在しない。

(5)『和辻哲郎全集』十一巻、一〇〇頁。

(6)『九鬼周造』、八五頁。

(7)『九鬼周造全集』二巻、二五七 - 二五九頁。

(8)『和辻哲郎』、一六五頁。

(9)『和辻哲郎全集』第十一巻、五頁。

(10)『人間存在の倫理学』、十三頁。

(11)『和辻の倫理学を読む』、四〇頁。

(12)『和辻哲郎全集』第十一巻、一九頁。

The Self-Others Problem in Watsuji and Kuki

Liu Ching-Yu

Abstract:

This article attempts to discuss the characteristics of Japanese culture based on the similarities of the "Self" and "Others" as proposed by Watsuji and Kuki. They both base their arguments on the criticism of the concept of “individualism” in a Western philosophical context. In Watsuji Tetsuro’s Rinrigaku: Ethics in Japan, he redefines the concept of ethics. In his opinion, "Others" should not be excluded from the individuals other than "Self"; rather, "Others" should be considered as an individual in the community in the same way as the "Self". The critical issue of ethics is to recognize the roles of "Self" and "Others" in the community.

In The Structure of "Iki" and The Problem of Contingency, Kuki points out the lack of the necessity of individual existence. There is no necessity, whether it is in the existence of "Self" or in relationships with others. Therefore, when facing an unknown future, one has to maintain an open-minded attitude, that is, to accept the persistent change of "Self" and "Others"

While Watsuji and Kuki keep very different ethical stances, they actually reflect different aspects of the same Japanese culture.

Key Words : Self, Others, Iki, relationships, community